

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、最終的にそうなるのが、私の本望だ。
- 2、理由はどうあれ、遅刻はご法度である。
- 3、この夏、カーブの投げ方を会得した。
- 4、感極まって、思わず涙がこぼれた。
- 5、父は学生のころ、研究に精進したそうだ。
- 6、航海中の船が横浜にキコウする。
- 7、野球部のシュショウ。
- 8、日本の有名なサンミヤク。
- 9、これはキヨウウの範囲をこえる量だ。
- 10、どうしたものかとシアンする。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

村林は、関西出身の転校生。同じ立場であった大谷のようにはうまく立ち回れず、クラスの中で苦労しています。そんな村林と、美人で口下手な十河は、落語家の今昔亭三ツ葉に落語を教わっています。以下は、村林と十河の二人が出演する落語会での場面です。

「よく、来てくれたなあ！」

俺は心から叫んだ。もう頭を撫でさすって骨がきしむほど抱擁してやろうかと思つたが、嫌がるだろうから遠慮した。本当によく来たものだ。

宮田の子分ではなさそうだし、宮田に反旗を翻すタイプにも見えない。宮田の皮肉を誤解するほど頭が鈍そうでもなかった。

藤村のほうに照れたように、

「ヒマだし」

とつぶやいた。

「村林って絶対ヘンだよな」

と大谷のほうと言った。

「本当に落語やるの？ この人に習ったの？ なんて知り合いなの？ 親戚か何か？」

矢継ぎばやの質問に、村林がとまどつたようにぼちぼち答えると、大谷ははつきりと強い興味を目の中に浮かべた。

「大谷は落語、好きなんか？」

村林が尋ねると、

「俺はよく知らないけど、うちのお母さんが白馬って人、ほら、お酒のコマーシャルやって温泉で泳いでる人いるじゃない？ あの人が好きでさ、テレビ見てるよ」

大谷は答えた。そして、俺のほうをむいてコマーシャルに出ているかと尋ねるので、俺は有名じゃないから出ていないけれど、草原亭白馬師匠はよく知っていると言えると、案外、尊敬の眼差しで見られた。

「村林って変わってるよな」

大谷はもう一度しみじみと言った。

①「ちよつとさ、しゃべってみたかったんだ」

そこで、急に声をひそめて、

「学校じゃ、むずかしいだろ」

とささやくと、馬鹿、と藤村が大谷の脇腹を肘で小突いた。②そのやりとりだけでも、五年三組における村林の待遇がおおよそ想像がついた。

「宮田、来ねえよな？」

大谷は独り言のようにつぶやいた。

村林の顔つきが、ゆつくりと変わった。頬がかすかに赤らんで、目尻と唇に緊張が走った。

「帰ったほうがええで。来たらどうする？」

横面を張るようにびしゃりと言った。大谷は実際にピンクをくらったように、痛そうに目をつぶった。すると、藤村が言った。

「こいつもね、三年ン時、大阪から転校してきたんだよ」

大谷をかばうように言った。

「こいつ、よく、村林のこと言うんだ。今日も、こいつが行こうって言ったんだ」

村林は、まず大谷を、次に藤村をまじまじと眺めた。それから、ゆつくりと言った。

「ありがとう」

大谷と藤村の間の空間に、溜め息をつくように静かに言った。

「俺、来てくれたん、ほんまに嬉しいわ。落語、聞いたってほしいわ。そやけど、やっぱり、帰ったほうがええよ。もし、宮田来たら、二人のこ
とよく思わへんで」

一度、言葉を切った。

「俺、そんなん嫌や」

③ カッコつけやがって、と俺は思った。

その時、かんだかい女の子の音が響いた。

「あーっ！ フジムラとオオタニだ。やつぱり、来てる！ 誰かいると思ったあ！」

「げ！ 斎藤！」

村林と藤村と大谷は声をそろえて言った。昨日、村林が阿呆な女だと電話で言っていた斎藤という子らしかった。

「ミヤタ、来てるよ」

あっさりとボスも呼び捨てにして斎藤は言った。

「門のどこ。ノダとオグチとヨシザワもいるの。あたしに、中の様子見てこいつてサ」

五年三組の四人は、それぞれの顔を探るように次々と見つめた。誰も、どうしたらいいのかわからないようだった。

「よし。村林。お出迎えにいらおう」

俺は腹に力を入れて声を出した。

村林は気づかうように、藤村と大谷の顔をもう一度見た。斎藤の顔も見た。

「みんなで行こう。みんなで、五年三組の宮田様ご一行を迎えに行こう」

そう言うと、小学生四人は、意外と素直に俺のあとについて、とことこ階段をおりていった。

(中略)

宮田が退屈そうに首をぐりぐりとまわしはじめた。立ち上がって出ていきやしないかと心配になった。しかし、彼が寝ていないのはわかったし、
これまでじっとしていたということは、実は、意外としつかり聞いていたのかもしれない。

早く怪談が終わればいい。いや、もうこんなに心配するのは身体に悪いから、^{はなし}嘶そのものが終わってくれないかと思う。

村林の声がまた復活して、かんだかく響いてきた。ここは彼がひどく好きな部分だ。

「全身は濡れ鼠、白地の浴衣が身にびちゃーつとまといついて、髪はザンバラ、顔は真っ青……」

稽古の時に、以前は必ず、自分で笑ってしまい、よく叱ったものだった。

「さっきい助けてやろうと、おっしやった、おーかーたあ」

この先だ。

「わあ、こわあ！ わあ、こわあ！ わあ、こわあ！ ああ、びっくりしたあ！」

ありったけの声で絶叫した。そして……

絶叫の反動のように、フル回転したプロペラが止まってからもまだ震えているように、笑い出した。息を吸うように、引きつけるように笑い出
した。

「い、ひ、ひ、ひ、ひ」

これには、会場中が吹き出した。

まさに、会場中。掛け値なしの全員。

「あーっ！」

村林は腕をいっぱい伸ばして指さした。

「宮田が笑た！」

もう一度叫んだ。

「宮田が笑たア！」

さらに叫んだ。

「やったアー」

客はわけがわからず、しんとしていたが、これまでおとなしかった五年三組が、いっせいに、堰を切ったように笑い始めた。まあ、なんという
か、④ 景気の悪い笑いではあった。忍び笑いというか、鼻を鳴らすようなのがこすれるような。

宮田は思わず腰を浮かせて立ち上がりかけあわてて元に戻り、髪をかきあげた。

高座はもうめっちゃめっちゃだった。

村林は、なんだか目的を達して気が済んでしまったように、嘶を中断したまま、ぼんやりしていた。

「いーっ！」

俺は怒鳴った。

「先をやれ！」

「あ、どこやったっけ？」

村林が真顔で尋ねてきたので、また爆笑が起きた。

「わあこわ、わあこわ、とわめくことだ」

「その先、何やったっけ？」

村林はすいませんというように、ひよいと頭を下げた。俺も度忘れしてしまった。

「え？ 何だっけ？」

もう、まるで漫才だった。

「こら、こら、こら、こら、三つ葉師匠！」

柏家^(注3)ちまきは半畳^{はんじょう}を入れるし、客は笑うし結局、続きを教えてやったのは十河だった。

そのあとは、まるで、いけなかった。詰まる、飛ばす、間違える、黙る、考え込む……。別人がやっているようだったが、どちらかといえば、こつちのほう^⑤が、いつもの村林の噺に近かった。客席には妙な緊張感がみなぎっていた。皆、はらはらしていた。退屈する暇も、白ける余裕も

なかった。ある意味では、前半以上にしっかりと注目を浴びていた。笑い声はなく、神経質なピアノリストのコンサートのように、咳^{せき}をするのも遠慮がちだった。

「今度はねえ、濃いイお茶が一杯、恐い」

ようやく有名なサゲにたどりつくと、やれやれというような、よしよしというような、よくやったというような暖かい大拍手がわきおこった。

宮田がチラとでも拍手してくれればいいなと思っただが、彼はそれだけの度量はないようだった。^⑥大谷と藤村は拍手していた。立派な男達だと感心した。

中入りになって、^⑦宮田は真つ先に部屋を飛び出した。友人三人が続き、斎藤が続き、大谷と藤村も後を追うように出て行くと、村林も脱兎^{だつと}のごとく駆け出した。

玄関に五年三組が集結した。

俺ものこのこついていったが、階段の途中で足を止めた。

「どうも、ありがとうな」

村林が長い噺をしゃべって、かすれた声で懸命に叫んだ。

「来てくれて、ありがとうな」

宮田以外は、皆、振り向いた。

「宮田！」

村林ははつきりと名前を呼んだ。

「最後までいてくれて、ありがとう」

宮田は身体の向きは変えずに、首だけわずかにひねって面倒臭そうに振り返った。

「俺、ほんまに、宮田に聞いてもらえろとは思ってなかった。メチャ嬉しかった」

村林が興奮状態のためだろう、あとで恥ずかしくなりそうな率直さでそう言う、

「おまえは、みつともないな。なんか、こう最低にみつともないな」

宮田は独り言のようにつぶやいた。

「キライなんだよ。たまねえんだよ」

割れて高い嫌な声でつぶやいた。俺は思わず階段を二段降りました。ぶんなぐってやろうと思った。いつか村林に冗談半分で宮田をノバしてくれと頼まれたことがあった。いい機会だ。

すると、村林が言った。

「そやから、笑たんやろ？」

真面目で落ち着いた声だった。

「俺がみつともないから、宮田、笑たんや。落語は、人が自分よりみつともないと思て、安心して笑うもんやて、三つ葉さんが、ゆうとった」

宮田はそこで初めて村林の目を見た。黙っていた。言うことを思いつかないのだろう。

俺は階段の途中で、握った拳^{げんこ}固で頭をかいた。そんなこといつ言っただけな。勝負、勝負と息巻いていた村林の耳に、そんな言葉が届いて住みついてたのが信じられなかった。

村林は、本当に落語を一つ完全にモノにした。セコでも子供でも関係ない。^⑧何年も修業した噺家以上に噺家らしい噺家になった。宮田の侮辱^{ぶじよく}に思わず拳^{こぶし}を丸めた俺よりも上をいくと思ひ、恥ずかしくなる。悔しくなる。

「みつともないよ。面白かったよ」

大谷が蚊の鳴くような声でささやいた。その一言を言うのにどれだけの勇気が必要とするかを考えると、なんだか胸がつまった。

「俺な、明日から、東京の言葉しゃべるんや」

村林は大谷に向かってそう言った。

「へー。しゃべれんのかよ？」

宮田の子分の一人が冷やかした。

「しゃべれるで。ちよつと発音悪いけど」

村林が言うと、

「大丈夫や。すぐ慣れるわ」

大谷は関西弁で励まし、自分で驚いたように、あれ？ と笑った。

「つられたなあ。もう忘れた思ってたのに」

「明日な」

と藤村が言った。

「明日な」

と村林が同じ言葉を繰り返した。同じ言葉なのにイントネーションがまるで違い、^⑨それは少年達の間の遠い隔たりのようでもあり、近づいためにジャンプする助走距離のようでもあった。

玄関に、^⑩もう宮田の姿はなかった。

(佐藤 多佳子「しゃべれども しゃべれども」より)

(注1)「宮田の皮肉」……………宮田は前日、村林の落語会をクラスのみんなで応援しに行つてやろうと皮肉まじりに呼びかけた。

(注2)「草原亭白馬師匠」……………三つ葉の師匠の兄弟弟子で、人気落語家。

(注3)「柏家ちまき」……………三つ葉の友人の落語家。

問 一、——線①「ちよつとき、しゃべつてみたかったんだ」とありますが、大谷が村林と「しゃべつてみたかった」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、同じ関西出身の村林と、関西についてとことん語り合いたいと思つていたから。

イ、同じ関西出身の村林を変わった人間だと思つていたので、話した時の村林の反応に興味があったから。

ウ、同じ関西出身の村林と話すことで、忘れてしまった関西弁を思い出したかったから。

エ、同じ関西出身であるにもかかわらず、自分とは異なるスタンスをとり続ける村林に興味があったから。

問 二、——線②「そのやりとりだけでも、五年三組における村林の待遇がおおよそ想像がついた」とありますが、学校での村林はどのような存在だと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、クラスの中でも人気者で、皆が「話してみたい」と感じるような存在。

イ、クラスのボスである宮田ににらまれ、仲間はずれにされている存在。

ウ、親しい友人は藤村しかおらず、仲間はずれにされているいじめられっ子的存在。

エ、皆と親しくしており、おもしろがられている存在。

問 三、——線③「カッコつけやがつて、と俺は思った」とありますが、それはどのような思いですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「俺」は、本当は大谷と藤村に落語を聞いて欲しくせに、宮田と二人の関係が悪くなることを心配している村林をいまいまく思っている。

イ、村林は、本当は大谷と藤村に落語を聞いて欲しくせに、宮田と二人の関係を心配して無理していることに「俺」はある種の好感を持っている。

ウ、「俺」は、本当は大谷と藤村に落語を聞いて欲しくなくせに、あたかも二人と宮田との関係が悪化することを心配しているようにいう村林を腹立たしく思っている。

エ、村林は、本当は大谷や藤村が、宮田によく思われなくなること望んでいるのに、二人を心配しているように見せかけるふりがうまい、と「俺」は感心している。

問 四、——線④「景気の悪い笑いではあった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、景気よく笑うことは、宮田に対して遠慮があったから。
- イ、景気が悪い時代ならではの笑いだったから。
- ウ、村林の落語が景気よく笑えるほど面白くなかったから。
- エ、景気よく笑うと村林がかわいそうだと思ったから。

問 五、——線⑤「客席には妙な緊張感がみなぎっていた」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、村林が今度はいつ詰まったり、飛ばしたり、間違えたりするかと、客たちは意地悪く期待し、逆に力が入ってしまっているというところ。
- イ、村林があまりにも詰まったり、飛ばしたり、間違えたりするので、最後までこのままいくかと思うと、客たちは途方に暮れてしまうということ。
- ウ、村林が詰まったり、飛ばしたり、間違えたりするほうが、子供らしくてかわいいので、順調に話していると、客たちは逆に緊張するということ。
- エ、村林があまりにも詰まったり、飛ばしたり、間違えたりするので、客たちは最後まで話し切れるのかと心配して緊張しているということ。

問 六、——線⑥「大谷と藤村は拍手していた。立派な男達だと感心した」とありますが、どういうところが「立派」のですか。それについて説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、宮田との関係を踏まえて、文章中から十一字で探し、抜き出して答えなさい。

十一字

ではないのに、宮田の前で拍手してくれたから。

問 七、——線⑦「宮田は真つ先に部屋を飛び出した」とありますが、この行動と好対照となる村林の様子を描写した一文を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問 八、——線⑧「何年も修業した噺家以上に噺家らしい噺家になった」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、何年も修業した噺家よりも、みつともないことができるようになったということ。
- イ、何年も修業した噺家よりも、上手に宮田の侮辱をかわしたということ。
- ウ、何年も修業した噺家もかなわないほど、上手に落語が演じられるようになったということ。
- エ、何年も修業した噺家よりも、立派な心構えを持っているということ。

問 九、——線⑨「それは少年達の間の遠い隔たりのようでもあり、近づくためにジャンプする助走距離のようでもあった」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、同じ関西出身でも、イントネーションがまるで違うように、たとえ同じ東京の言葉を話すことを試みても、結局はうまくいかないということ。
- イ、イントネーションの違いがあるのと同様に、境遇にも違いのある少年達は、ぶつかり合いながら微妙な距離感を獲得していくということ。
- ウ、イントネーションに大きな違いがあるのと同様に、少年たちにも違いはあるが、同じ言葉を話そうとすることで、違いを乗り越え、新しい友情を築いていくということ。
- エ、イントネーションの違いと同様に、少年達の間にはうめようのない遠い隔たりがいつまでも残り、真の友情は成立しないということ。

問 十、——線⑩「もう宮田の姿はなかった」とありますが、これは宮田のどのような性質を表していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、村林や大谷が築こうとしている新しい友情に気づいてはいても、自分は決して加わろうとはしない意地っ張りな性質。
- イ、村林や大谷が築こうとしている新しい友情に加わりたいという気持ちはあるが、素直になれない性質。
- ウ、村林や大谷が築こうとしている新しい友情にも、自分が仲間にならないうることに気づかない鈍感な性質。
- エ、村林の落語を聞いて笑ってしまったことが、照れくさくて仕方がないと感じ素直になれない性質。

問 十一、この小説は、誰の視点で書かれたものですか。その人物名を文章中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代の日本語教育は、「文章を読む」ということと、「わかりやすい文章を書く」ということに、あまりにも偏りすぎていると、私は思います。

日本は、文書の国です。役所でも会社でも、「書類の不備」を理由に突つかえられてしまうことがいくらでもあります。昔の日本人にとって、教育とは、「ちゃんとした文章を書けるようになること」でした。国語の授業が「文章を読む」に偏っているのは、「ちゃんとした文章を書くためには、その参考になる文章を知っていなければならない」ということがあるからでしょう。そして、文章というのは、昔は「むずかしいもの」と相場が決まっていた。①「むずかしくなければ文章じゃない」というへんな考え方が生まれて、その偏向は、第二次世界大戦以後の「民主化」の風潮の中ですこし見直されました。見直されたのはいいのですが、

A という日本人の悪いくせがあらわれて、そのうちに、「文章というものはわかりやすいものほどうい」になってしまいました。その結果、今の現代国語の教科書は、「わかりやすい文章を書くために、わかりやすい文章を読む」のオンパレードです。「わかりにくい文章」より「わかりやすい文章」がいいのはもちろんです。でも、そうなったとき問題になるのは、その文章を書いたり読んだりする、人間の「中身」なのです。

②人間というのは、そんなに単純なものじゃありません。けっこう複雑なものです。その複雑な中身を持った人間が自分のことを書くんだとしたら、そうそういつも「わかりやすくかんたんに」というわけにはいきません。複雑で、そんなに「わかりにくくもない内容を書くんだしたら、文章の方だつてそれに合わせて、「複雑でわかりやすい文章」になります。「わかりやすいもの」の方がいいにはきまっていますが、そうそうなんでもわかりやすくすることなんてできないのです。

「かんたんな内容」を、「わかりにくく複雑で持つて回った文章」にされたら困るでしょう。その代表的なのが、国会で政治家が読み上げる文章です。政治家たちは、話しているつもりで、じつは文章を読み上げているだけなのですが、あんなものほもつと「わかりやすい表現にしてみたらな」と困ります。③「わかりやすいだけで中身がない」では困るのです。十年ほど前の日本には、「言語明晰、意味不明瞭」と言われた総理大臣がいましたが、最悪の日本語とは、そういうものです。

ところで、一番むずかしいのはなにかというと、「複雑な内容を持ったものをわかりやすく書く」ということです。これほどむずかしいことはありません。内容がわかりにくいものなら、その内容に引きずられて、文章の方だつてわかりにくくなってしまう。そこを引きずられずに、「ウーン」とうなりながら、他人のために表現をわかりやすくする——文章を書くうえで一番むずかしいことはこれです。「複雑なことをかんたんにわかりやすく書く」というのは、文章を書くうえでの高等テクニックですが、「それができるようになるにはどうすればいいのか？」というこの答は一つです。「むずかしい内容」を「むずかしい内容を」に慣れる——これだけです。

「消化のいいものばかり食べていたら、顎や歯や消化器の発達が遅れて、人間として問題の多い体になる」というのと同じです。古典をふくむ「む

ずかしい日本語」を国語教育の中から排除して、国語の授業がただ「わかりやすい」を中心にするだけだと、④困ったことになるのです。

日本に生まれて日本に育った日本人にとって、日本語をしゃべるのは当たり前のことです。読むことだつて書くことだつて、そうそうむずかしいことじゃありません。ある程度の漢字を知つてしまえば、「もう自分はこれ以上の日本語を習う必要なんかない」と思つてしまいます。「わかりやすい」だけの国語教育は、⑤「こういう人間たちに、平気で「もう知つているからいい」と言わせてしまうのですね。

もう一つ、「今の人たちはあまり本を読まない」ということがあります。本を読まないからといって、そういう人たちが言葉を失つて黙っているということはありません。しゃべりまくるテレビの影響もあつて、本を読まない人たちは、逆におしゃべりになります。おしゃべりを当たり前にするようになってしまった人たちにとって、本に書いてある文章を読むというのは、かなりまだるっこしい行為なのです。

「本を読む」というのは、「黙つて本を読む」です。その間はおしゃべりを禁止されます。B、本を読みながら人にとって、本を読むとい

うのは、かなり時間がかかるものです。読んで、そのことを自分の頭で理解できるようになるまでにはかなりの時間がかかつて、それがめんどくさい。だから、「そんなの口で言えよ！」という文句になってしまふのですが、ところでしかし、どうしてそういうことが起こるのかと言え、それは、国語の時間に「話し言葉の勉強」をしないからです。

「日本語の乱れ」はよく言われます。この「日本語の乱れ」は、ほとんど「C」の乱れです。ひどい日本語を使う人たちは、まず文章なんて書きません。「文章を書け」と言われたら、とても窮屈にかしまつてしまふのが常です。「文章なんか書きたくないし、文章なんか関係ない」と思っている若い人たちが、自分たちの好き勝手にしゃべる言葉をそのまま文章にしたら、おそらくほとんどないものになります。⑥「なんでそうなるのかと言つたら、国語の時間に「日本語の話し方」を勉強しないからです。日本語の教育は「読む」と「書く」だけで、「話し方」なん

てものはありません。「基本になる話し方」を知らないんですから、話し言葉がいくら乱れたつて不思議はありません。

体に障害がなければ、「読み書きはできるけれど話すことはできない」ということは起こりません。人間の最初は「話す」です。ちゃんと話すことができていたら、その内容をちゃんと書くことだつてできます。話はかんたんです。日本の国語教育が「読み書き専門」になっているのは、この前提を踏まえているからです。小学校に入ってくる子供は、誰だつて「しゃべる」ということはできるのですから。D、人間というものは、途中で何度も成長して、変わるのです。いつまでも同じではありません。「昨日までのこと」に、「今日」はもうあきています。人間は、いろんなことを経験して、複雑なことになっていく。

E、おしゃべりだった子供も、いつの間にか寡黙になるし、黙つてばかりいた子も、いつの間

におしゃべりだった子供がしゃべらなくなるのは、彼や彼女が「複雑な内容」を抱えてしまったからです。「しゃべりたくないわけじゃないけど、

どうしゃべったらいいかわからない」——それで寡黙になる。おとなしかった子供がいつの間にかおしゃべりになるのは、その逆で、おとなしくしているうちに、「どうしゃべればいいか」という方法をマスターしてしまったからです。成長する人間にとって、「話し方」の勉強だって、やっぱりその時その時で必要なんです。

「現代のおしゃべり」と「古典」というのは、全然関係ないと思っている人は多いと思います。ところが、そうではないのです。「おしゃべり」とか「話し言葉」なんかとはまったく関係なくて無縁だと思われている「昔の古典」が、じつは、「現代の言葉」と大きな関係を持っているのです。そういうことを忘れてしまっているから、話し言葉の混乱だって^⑥起こる。そんなことだってあるのです。

(橋本 治「これで古典がよくわかる」より)

問 一、——線①「相場が決まって」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、無理やり信じさせられて イ、間違った考えが世間に広まって
- ウ、相談したうえで決められて エ、一般に広く考えられて

問 二、A にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、はっきり否定できない イ、極端から極端に走る
- ウ、皆と同じでなければならない エ、国語より英語を重視する

問 三、——線ア、オのうち、文脈上意味の通らないものをすべて選び、記号で答えなさい。

問 四、——線②「人間というのは、そんなに単純なものじゃありません。けっこう複雑なものです」とありますが、なぜ「人間」は「複雑」なのですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

人間というのは、十五字以内ものだから。

問 五、——線③「困ったこと」とありますが、それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、むずかしい文章をかんたんに読まなければならないということ。
- イ、複雑な文章を読んでいたらわかりやすい文章を書けなくなること。
- ウ、かんたんな内容を複雑な文章で書かなければならないということ。
- エ、むずかしい内容をわかりやすく書くことができなくなること。

問 六、——線④「こういう人間たち」とはどのような「人間たち」ですか。文章中の言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

問 七、B・D・E にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

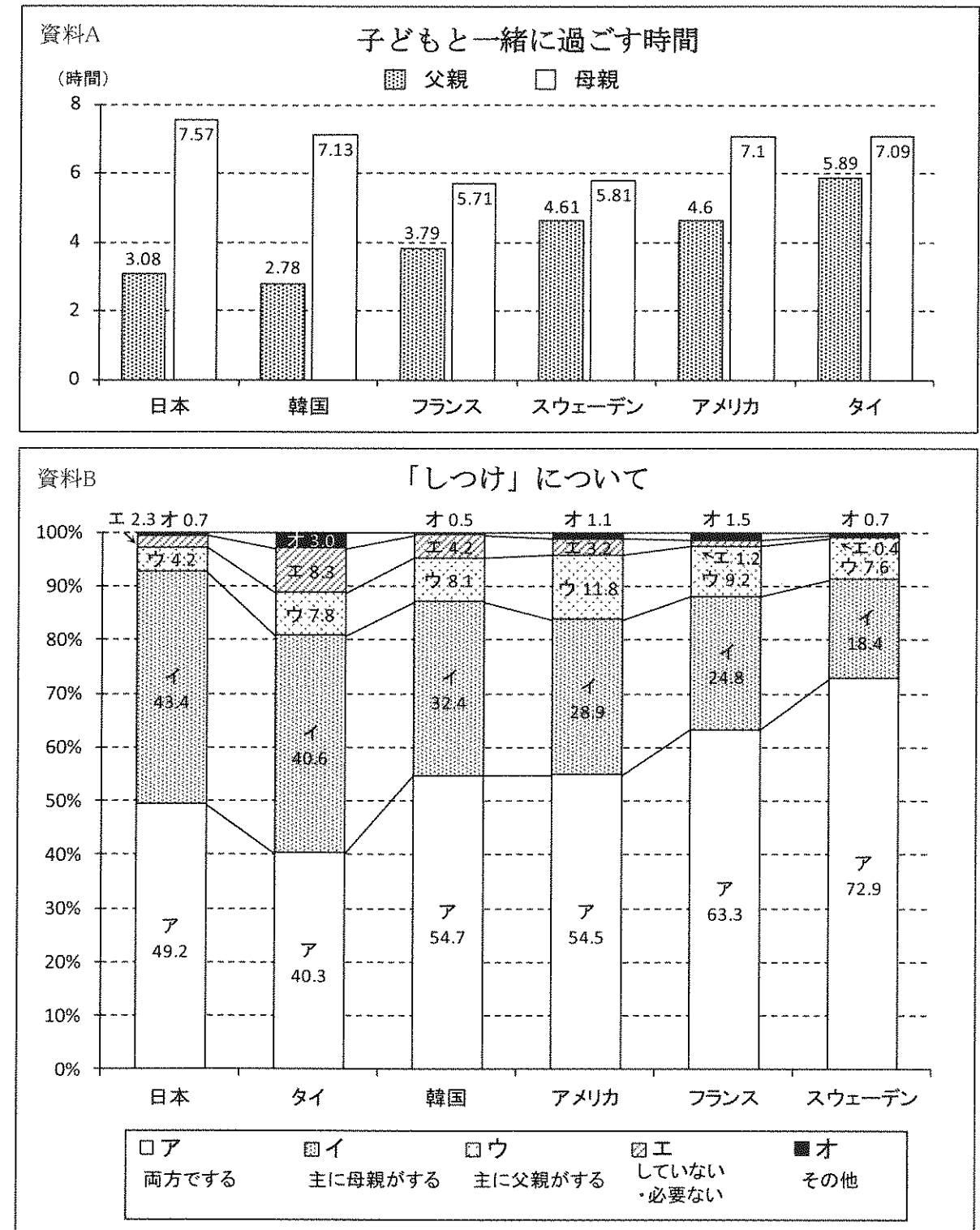
- ア、ところが イ、なぜなら
- ウ、しかも エ、だから

問 八、C にあてはまる言葉を文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

問 九、——線⑤「国語の時間に『日本語の話し方』を勉強しない」とありますが、それはなぜですか。その理由が書かれている一文を文章の中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 十、——線⑥「起こる」の主語を文章中から一文節で探し、抜き出して答えなさい。

四 次の資料は家庭教育に関するアンケートの結果です。これを見て、あとの問いに答えなさい。



(上記資料は、国立女性教育会館「平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書」を基に作成した)

問 一、資料Aのデータの並び方の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、日本以外は、「父親」に関する項目の数値が低い順に左から並んでいる。
- イ、「父親」と「母親」の数値の差が大きい順に左から並んでいる。
- ウ、日本を基準にして、結果が日本に近い順に左から並んでいる。
- エ、結果の特徴が似ている国が隣り合って対になるように並んでいる。

問 二、資料Aを見て、結果が父親・母親ともに日本とは最も対照的だと言える国を次から選び、記号で答えなさい。

- ア、韓国 イ、フランス ウ、スウェーデン エ、アメリカ オ、タイ

問 三、資料Bは何を調べるためのアンケートですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、家庭教育における母親の存在感の大きさが、国ごとにどのように異なるかを明らかにするため。
- イ、家庭教育における父親と母親の関わり方が、国ごとにどのように異なるかを明らかにするため。
- ウ、子どもに対するしつけの厳しさの度合いが、国ごとにどのように異なるかを明らかにするため。
- エ、子どものしつけに対する父親と母親の考え方が、国ごとにどのように異なるかを明らかにするため。

問 四、資料A・Bから言えることとして適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、欧米の三カ国は、子どもの世話やしつけに関して父親が参加する度合いが日本よりも高い。
- イ、他国に比べて日本では、子どもの教育について父親より母親の考えを重視する傾向がある。
- ウ、子どもの世話やしつけが両親を中心に行われていることに関しては、六カ国とも変わりがない。
- エ、日本の父親は子どもと一緒に過ごす時間が短く、子どものしつけをほとんどしないという傾向がある。
- オ、欧米の母親が子どもと一緒に過ごす時間が短いのは、父親が子どもの面倒を見てくれるからである。
- カ、フランスやスウェーデンでは、子どもの世話やしつけを両親ともに行うことが主流となっている。

